

Весна в Хонго



本郷の春

ウラジーミル・ナボコフと亡命ロシア作家たちをめぐる
連続講義の記録

The Spring in Hongo



沼野充義・毛利公美・奈倉有里 編

2011

東京大学文学部 現代文芸論・スラヴ文学研究室

目次



- はじめに 沼野充義……………3
- キャサリン・T・ニェポムニヤシチー Catharine T. Nepomnyashchy
(コロンビア大学バーナード・カレッジ教授)
◇「プーシキンとく黒」 翻訳 高橋知之……………7
- ダヴィド・シュライヤー=ペトロフ Давид Шрайер-Петров
(ソ連出身、アメリカ在住のロシア語作家)
◇「ロシアの作家から見た日本の知識人」講義概要 奈倉有里……………19
◆ 短篇小说「ワタナベ・アキラの恋」 翻訳 奈倉有里……………22
- マクシム・シュライヤー Maxim Shrayer
(ボストン・カレッジ教授、ロシア/ユダヤ文学研究者・作家)
◇「文学的バイリンガリズム—宿命か、選択か」講義概要 奈倉有里……………34
◆ 自伝的長編小説『アメリカを待ちながら——亡命の物語』
Waiting for America (英語) より 翻訳 守屋愛……………37
- アンドレイ・バビコフ Андрей Бабиков
(ナボコフ研究者、ナボコフ戯曲集『モルン氏の悲劇』編者)
◇「劇作家ナボコフ」翻訳 毛利公美……………50
- マリヤ・マリコワ Мария Маликова
(ロシア科学アカデミー・文学研究所研究員、詩人文庫版ナボコフ詩集編者)
◇「ロシア詩人としてのヴラジーミル・ナボコフ=シーリン」
翻訳 竹内恵子……………67
- ユーリイ・レヴィング Юрий Левинг (ダルハウジー大学准教授)
◇「『賜物』講義概要精読への序章」講義概要 奈倉有里……………109

Весна в Хонго / The Spring in Hongo

本郷の春

Edited by M. Numano, K.Mouri, and Y.Nagura

Dept. of Contemporary Literary Studies / Dept. of Slavic Languages and Literatures
The University of Tokyo, 2011

Содержание / Contents

Introduction Mitsuyoshi Numano	3
Catharine T. Nepomnyashchy (Columbia University) ◇Pushkin and Blackness (Translated from English by Tomoyuki Takahashi)	7
Давид Шраер-Петров (Писатель) ◇Японский интеллигент глазами русских писателей (Резюме лекции Юри Нагура)	19
◆Рассказ, Любовь Акира Ватанабэ (Перевод с русского Юри Нагура)	22
Maxim D. Shrayer (Boston College) ◇Литературные двуязычие как судьба и как выбор (Резюме лекции Юри Нагура)	34
◆ An Excerpt from <i>Waiting for America: A Story of Emigration</i> (2007) (Translated from English by Ai Moriya)	37
Андрей Бабилов (Культурный центр Украины в Москве) ◇Драматург Набоков (Перевод с русского Куми Моури)	50
Мария Маликова (Пушкинский дом, РАН) ◇Владимир Набоков-Сирин как русский поэт (Перевод с русского Кэйко Такэути)	67
Юрий Левинг (Dalhousie University) ◇Попытка медленного чтения «Дара» (на материале первой страницы романа) (Резюме лекции Юри Нагура)	109

—長編小説より抜粋—

アメリカを待ちながら——亡命の物語（抜粋）

マクシム・シュライヤー 著
守屋愛 訳*

パラダイスに避難

ぼくたちは、今はないトランス・ワールド航空に乗って、1987年8月の終わりにアメリカに到着した。移民たち — ソ連から、インドから、パキスタンから、エジプトからの移民たち — でいっぱい飛行機だった。それで、飛行機がケネディ空港の滑走路に着陸したとき、ぼくたちは皆拍手した。目前に新しい世界の新しい生活がある。2007年夏に40歳になったら、ぼくは人生の半分をアメリカで過ごしたことになる。かつてのぼく、モスクワ出身のユダヤ少年には、たいした偉業だ。

1987年にオーストリアとイタリアで過ごした夏は、アメリカ人の『ぼく』からロシア人の『ぼく』を分離する道を整えた。いわば緩衝時間のように、ここに描かれた三か月間、ぼくの人生を、アメリカの現在からロシア（とソヴィエト）の過去を切り離して、分けてしまった。しかしながら、この亡命の物語は、ぼくたちのイタリア滞在のほとんど最後に起こったもう一つの冒険なくしては、完結しなかつただろう。それは、ソ連に暮らした20年間にすらなかつたことだが、ぼくが絶望的な貧しさを味わった、人生で初めてただ一度の時だった。

では、ソレントでの8月の第二週を描写しよう。日光が汗だらけの手のひらで、のどを締めつけていたのも、ゆるめ始めていた。母とぼくは南イタリ

*Copyright© 2007-2010 by Maxim D. Shrayer 作者の許諾により日本語へ翻訳、収録。
原著 Maxim D. Shrayer, Waiting for America: A Story of Emigration (Syracuse University Press, 2007)

ア三日間の旅をしていて、ポンペイでお金と身分証明書を盗まれてしまった。父は、一週間早くピーニャおじさんと一緒にポンペイとソレントを観てしまっていたので、後方のラディスポリに滞在していた。

ナポリのヌオーヴォ城、そこでは玉石が古代ヨーロッパの洗練された塵の香りではなく、安っぽい赤ワインやサーディンの臭いを発していた、そのヌオーヴォ城ツアーの後、ツアーガイドは、これから聖ヤヌアリーウスの遺骨が埋葬された教会を訪れると強調していた。このナポリの守護聖人の名前から、ぼくは雪を思い浮かべた。微臭い芳しい空気につつまれた、冷たいドームの中に立っていると、ぼくはノスタルジックな思い出の中にいるような気持になった。祖国の冬景色を思い浮かべた。雪の吹きだまり、凍った川、送電線についた霜。空想の中で、ぼくは顔の思い出せない女の子と口づけをしていた。けれども、唇は温かく、親しげな味だった。初老の守衛がぼくの袖を引っ張ったので、ぼくの空想は教会の床石に打ち砕かれた。

「帽子を取りなさい、ミスター。帽子を取るんだ。神聖な場所にいるんだから！」守衛はその黒い指でぼくの青いリボンのついたカンカン帽を指差した。彼はぼくの迂闊なので腹を立てていた。

ぼくはその場凌ぎのイタリア語で、(今やネイティヴに近いジェスチャーで補っているとはいえ、植物的なラテン語にまだどっぷりと頼っていたが、)ユダヤ人は神の御前では頭をむき出しにしない、それどころか、いつでも、とりわけ寺院の中では、ずっと帽子をかぶっているものだ、と守衛に説明し始めた。どう理解してもらえたかはわからない。

ぼくの長ったらしい説明から、守衛はあきらかに『シナゴグ』というたった一言を聞き分けて、顔が蒼白になった。

「シナゴグだって！でも、ここはキリスト教会だよ！帽子をとりなさい、あんた…」と、ここで彼は言葉不足を感じた。「聖ヤヌアリーウスの遺骨のそばに立っているんだ。帽子をとるか、さもなければ聖域から出なさい！」

帽子を取るべきだった。年老いた狂信者を笑うべきではなかった。けれど、ぼくは、祖国の雪や口づけしている女の子たちのことを考えていた。

ぼくたちの次の観光地はポンペイだった。この場所に関するぼくの知識とえば、西暦79年のヴェスヴィオ火山の噴火をえがいた、カール・ブリューロフ作のロシア古典絵画『ポンペイ最後の日』だった。思い出すのは、パ

ニックに陥ったローマの女たち男たちが深紅のトーガを身にまとい、家から駆け出して、渦巻く溶岩に圧倒されている様子だった。ぼくが実際に見たものの中には、悲劇的なものや荘厳なものはない。自分の母親の前で、女たちや他の男たちや動物たちと性交をしている男たちのフレスコ画を鑑賞する 20 歳の男を考えてほしい。蹄をもった小人たちと巨大な面々を思い描く。ポンペイの 8 月の昼下がりの乾いた暑さを想像する。ぼくたちを思い浮かべてみよう。ロシアからの亡命者が二人、石化した溶岩の上に、澄んだ青空のドームの下に、かつてヴィーナス神殿の壁であったものの間に立っている。

あのころ、ぼくはリュックサックをもっていた。ぼくが所有したことのある唯一のリュックサックだった。それは、ロシアを永久に離れる前の冬に、モスクワで口説いたアメリカ娘からのプレゼントだった。あのときぼくの背中にぶら下がっていた、青いリュックサックには、財布とたたんだパーカーと、世界中の知人全員の名前と住所の載ったアドレス帳が入っていた。古い財布は黄色の豚皮でできていて、かさばって、どのポケットにも入らなかった。中には、ぼくたちの旅の小遣い—70 アメリカドル、亡命者二人の、つまり、ぼくと母の旅行証明書が入っていた。正確に言えば、それは正式の亡命証明書でもなかった。ぼくたちはソ連の市民権を剥奪されたので、モスクワを発つ前にパスポートを引き渡さなければならなかった。だから、ぼくたちがウィーンとローマを旅行していたとき、ソヴィエト発給の出国査証がぼくたちの身分証明書の役目をしていた。ところが、いまや、この通行証明書といったものが、ぼくの青い米国製リュックサックの中に入った、ぼくの過去とのつながりの大部分と一っしょに消えてしまった。

実際何がおきたのか、わかることは決していないだろう。ぼくたちのグループは観光バスに戻ろうとしていた。ぼくは母親に水飲み場を探しに行くと言った。現代のポンペイは石化した記憶の格子だ。狭い通りが屋根のない家々にそって並んでいる。近くの路地へ曲がると、案の定、水飲み場にたどりついた。その休息はまるで蟹気楼のようだった。覚えているのは、リュックサックを泉から数フィート離れたベンチに置いて、それから、思う存分水を飲み、なまぬるい水を自分の頭と両肩にかけたことだ。そのあと、ほんの少し前にリュックサックがあった、薄紅色のみかげ石でできた広いベンチの方を

振り返ったが、そこにはなにもなかった。かつてはローマ人の快楽の町であった場所のまん中に、ぼくはぼつんと立っていた。ポンペイの蒼白い石を背景にしたらくつきりと目立つと思われる、明るい青のしるしを探したが、無駄だった。南イタリアの遅い午後空だけが、ぼくの頭上で深い青だった。全知の深い青だった。

ぼくはどうするべきだったか？このくずれた壁の迷路のなかで、どっちの方の道にいけばいいのか？自分自身が正気かどうかさえ疑わしくなってきた。リュックサックは円形闘技場に置いてきてしまったのかもしれない？悲劇詩人の家か、ファウノの家か？ホテルフォーラムか？ジュピター神殿か？ぼくは前後に猛進して、自分がどこにいるのか見極めようとした。ぼくはどうにかして関係することを思い出そうとした。フレスコ画、男根のレリーフ、ごみ箱、なんでもかんでも。そのとき、ぼくにはポンペイの家々がすべて同じに見えた。フレスコ画の男たちも皆そっくりで、カールした汚いたてがみのような髪の毛の、醜いやぎ男たちばかりだ。パニックだったが、ぼくは時間に遅れていること、バスのみんが駐車場でぼくをずいぶん待っていることをなんとか思い出すことができた。ぼくは全力で走った。かわいそうな母は知らせを冷静に受け取った。けれど、バスに乗っていた、ぼくたちと同じ境遇の亡命者たちは同情するそぶりも見せなかった。まるで、親切心はソ連の出国審査の出口バーの向こうに置いてきてしまったかのように。

「もうたくさんだ」と、ミンスクから来たピアノ調律師がぼくに面と向かって叫んだ。「私たちはソレントに遅れてしまうぞ」（まるでソレントに遅れるかもしれなかったかのように！）

「小さいリュックなんて見つかりっこないよ」とピンスクから来た歯医者はぼやいた。「アメリカで新しいのを手に入れるんだな。」

「お母さんがあなたをたたくの？」と、母親と耳の聞こえない祖母と一緒に旅をしている、ドヴィンスクから来た小さい女の子がたずねた。

ぼくは、無頼漢のニートチキンが旅行担当者に就けた、アナトーリー・シュタインフェルドに少しだけ時間をくれるよう頼んだ。「10分間ですよ」と彼は不潔な歯の間から声をしぼり出した。そして、シュタインフェルドは、バスの後ろに座って、両こめかみに手を押し当てていた、ぼくの母の方を得意げに見た。火の鳥を仕留めた後のジャッカルのように、シュタインフェル

ドはまだぼくの母への欲情にかられていたが、北イタリアへ旅行した後、それをあからさまにするのは躊躇していた。彼はいまやその人妻への欲情を、彼女の息子である、ぼくへの明らかな敵意に注いでいた。

ぼくは、『遺失・拾得物』室がきっとあるだろうと博物館事務所へ走った。事務所には男が三人いた。結局のところ、イタリアの公園監視員だったのだが、半ばフィクションのような、半ば制服のような服装をして、ぼくのイタリア語にも劣る英語を話した。かれらはぼくの身分証明書を見せるよう言った。

「なにも持っていません。リュックの中でしたから。」

「だが、あなたの証明書を見せてもらわないと、われわれは国立公園で捜索を始めるわけにいかない。」と三人の職員のうち一人が言った。「あなたがだれか他人の物を取ろうとしているのではないと、どうしてわかりますか？」

「いいですか、ぼくの種類は財布のなかにあるんです。財布は青いリュックの中にある、というか、中であつたし、そして、そのリュックがなくなつたんです。」

「気の毒だけど、この状況でわれわれにできることはありませんな。なにかが出てきたかどうかと、ここに電話をかけてみることはできますよ。でも、もしわたしがあなただったら。」と二人目の職員がぼくに葬儀屋みたいな微笑みを向けながら言った。「わたしだったら、カラビニエリ¹のところに行きますよ。外国人のことを扱っていますから。」三人目の職員は一言も言わなかった。

ポンペイを離れるバスの中で、母とぼくは二人とも、他のロシア人亡命者たちの中で完全な孤独を感じた。いまやアメリカへの通行証明書もなく、ぼくたちは単なる過去の人間にされてしまった。料金支払済みの観光があと二日間残っていたので、ぼくたちの苦境はとりわけ馬鹿げていた。それで、ぼくたちは降りることもできなかつたし、アメリカへの出発前の二週間以内に新しい通行証明書が交付されるはずの、ローマへ戻ることもできなかつた。

JIAS というレターヘッドのある紙に印刷された引換証には、右上と左下の隅に JIAS の割印がされた、ぼくたちの白黒写真がついていた。新品の証明書は、写真は本当に母とぼくのものだという事実を証明していて、ぼくた

¹ イタリアの国家警察

ちの生年月日とそれぞれの親の名前も記載されていた。引換証は、ポンペイで盗まれた、ソ連発行の元の出国ビザよりもずっと公式文書らしくなかった。この当座しのぎの証明書の、ぼくたちの身分を証明するイタリア語の文章の下に、後になって無表情な入国・帰化審査官がこんなスタンプを押すことになった。「I&N 法 207 条により亡命者と認定。米国から出国する場合、INS から再入国の事前許可が必要。就業認定」それから、下に「JFK 8/26/87」と自分のパッチナンバーもなぐり書きした。入国審査官はぼくたちの旅行証明書にスタンプを押して、ぼくたちの米国ビザを取ると、赤いいくつかの数字と文字が書かれた白いインデックスカードをぼくたちそれぞれに渡してくれた。

「ロードアイランドにいらっしゃるんですね」と、入国審査官はぼくたちを入国させながら言った。「いいところです。素晴らしいビーチだ。」

呆然としたまま、ぼくたちはレストランへ向かった。そこで、いまではニュージャージーに住んでいる、古いモスクワの友人がぼくたちにサンドイッチを食べさせてくれた。そして、そのあと、違うターミナルへ歩かされ、そこでぼくたちはちっぽけな飛行機に搭乗した。それは、ぼくの信じるどころ、国家的な商業航空会社ではもう旅客用に使用されていないようなプロペラ機で、そのぐらぐらした翼でぼくたちは JFK 空港から米国で一番小さな州のちっちゃな州都へ飛んで行った。ちっぽけな飛行機から町を見下ろした。そこは、アメリカでの最初の二年間をぼくが過ごすことになる町で、予言の一致なのだが、ぼくの妻が育った町だった。ぼくは最初のアメリカの故郷を見下ろして、思った。「神よ、プロヴィデンス²がどうしてこのように小さいはずがあるでしょう？」

しかし、ぼくたちのかなり悲惨な南イタリア旅行の後、次の二週間はそのようなことはもう起こらなかった。そして、観光バスがぼくたちをポンペイと青いリュックの盗難現場から連れ去るにしたがって、アメリカに来る見通しは暗く思えた。ぼくたち二人、つまりぼくと母にはポケットにある二十ドルくらいしか持っておらず、だれも助けてくれそうにもなかった。さて、ソレントに近づいてくると、アナトーリー・シュテインフェルドがみんなに、晴れた日にはソレント半島の先端の沖にカプリ島が見えると知らせた。カプ

² ロードアイランド州の州都。人口 16 万人の港市。

リ島が最終目的地だった。

ソレントでのあの晩のことをどう書いたらいいだろう？ぼくが撮影も演技もした、テクニカラー映画のひっかき傷のついたフィルム。褪せた色と鈍った感覚。そして、あこがれという、たった一つの鋭い感情。セイレーンはこの港からオデュッセウスを誘惑してそそのかした。ソレントは、ぼくがロシアの子供時代から知っていた永遠の調べだった。が、それにもかかわらず、その広場でも大通りでも、ぼくはよそものだった。鉄のカーテンの向こう側で育ちながらも、ソレントを見たいと切望していた。ぼくはこの場所とその伝説に引き寄せられてきた。かつて多くの偉大な作家たちがこの通りを歩き、このトラットリーア³に座ったことも知っていた。モスクワで自分の寝室の窓からどんよりした二月の雪の吹きだまりをじっと見つめながら、いつも頭の中ではそれらを思い描いた。巻きたばこをくゆらせたり、キアンティ⁴をちびちびのんだりしながら、かれらは何を考えていただろう？かれらは生まれ故郷を恋しく思っただろうか？春には遠く広く氾濫する、ゴーリキーのボルガ川。霧が多くミステリアスな、イブセンのクリスティアニア⁵。ぼくはロシアを恋しく思わなかった。いや、もちろん恋しかったのだが、帰ることはとてもできないと知っていた。ぼくがソレントであこがれたのは多少の安定性だった。ぼくの未来はとても不確実だったが、身分証明書とお金をなくしてさらに一層不安定に思えた。

メインプロムナードには、銀やトルコ石をおいた店のウィンドウがぼんやり見えた。若い魅惑的なカップルが人通りのど真ん中で互いの口をむさぼっていた。バンドが『帰れ、ソレントへ』を演奏し、母とぼくはその歌詞の意味を考えないようにするのに必死だった。

新しい帽子とサングラスを身につけた、ひとりよがりのアナトーリー・シュテインフェルドがぶらぶらとぼくたちを通り越して行った。それからすぐ、うしろを振り返って、母とぼくに追いついてきた。

「ぼくとロマンチックな夕食を共にしたいと思っていないんでしょう？」と、彼は母に言った。

³ イタリアの大衆レストラン

⁴ イタリア トスカーニ州産の、主に赤ワイン

⁵ オスロの旧称

「いいこと、シュティンフェルド。」ぼくの母がすぐさまきっぱりと答えたので、息子としての誇らしさで、ぼくの頬と耳はぱっと赤くなった。「第二に、わたしにはもうデートの相手がいるってことがわからないの」と、ぼくの腕に手をのせながら、彼女は言った。「それに第一、ポローニャで夫があなたに、私たちに近寄るなって言わなかったかしら？ねえ、わかる？バスがラディスポリに戻ったら、夫は広場にわたしたちを出迎えに来るんですからね。彼は二回警告なんてしないわよ。」そして、母はきびすを返して、ソレントの豪華にあざやかに着飾った人込みの流れの中へと私を引き入れた。ぼくはどんなに母が、彼女の強くてぶっきらぼうなところが好きだったことか！

結局、ぼくたちは見た限りで一番安いピザを二ピース買って、バンドの演奏を聴きながら、屋外のカフェをあちこちさまよったが、恥ずかしくて席をとることはできなかった。ようやく、他のところほど気圧されないカフェを見つけて、バンドが演奏していたり他の観光客たちがサラダやパスタの大皿を囲んでいたりとところから遠く離れた、隅っこのテーブルについた。ついにウェイターに見つかったとき、ぼくたちは、まるで食事を注文する気があるかのようにメニューを見たいと頼んだ。ウェイターが戻ってくると、ぼくはデザートメニューが見たいと頼んだ。「気が変わったんだ。お腹はすいていない」とぼくは説明した。ぼくたちは、ジェラートとピスタチオとスイカのアイスクリームのダブルを注文して、それに水道水をつけるよう頼んだ。ウェイターは、貴族が乞食を見るような目つきでぼくたちを値踏みした。彼はちっちゃなアイスクリームが二つとスプーンが一つのった皿を運んできたが、水はわざわざ持ってこなかった。ソレントの夕暮れに母とぼくとで分け合ったものほど、おいしいアイスクリームはなかった。

パラダイスに陸路で到達できる時代があった。かつては、ソレントを、その俗っぽい喧噪と派手な群衆の虚栄と高すぎるレストランや忘れられないジェラート屋とともに、後にすることができた。かつては、すりと宝石商たちの領域を簡単に見捨て、地球上のもっとも完璧な場所に狭い地峡を超えて歩いていくこともできた。だが、その後、ある日、天災によって本土とつながっていた岩が沈み、カプリは島になったので、いまでは水路でしか到達することができない。しかし、それでもやはり、いまでも人はなんとかそこに行け

る！

朝、貧弱な朝食の後、ぼくたちはナヴィガジオーネ・リベラ・デル・ゴルフ社が運航するフェリーに乗った。フェリーは、ぼくの子ども時代モスクワ川の左岸と右岸の間をいつも往来していたのとそっくりだった。年老いた障害者といったフェリーだ。剥げ落ちた塗料、きしむ扉、退職年齢の乗組員。フェリーがゆっくりと島に近づくころ、母とぼくは上のデッキに座って、前日の不幸を反芻していた。だんだんカプリ島が近づくにつれて、ぼくたちの気持ちは明るくなり、だんだん考えないようになった。

カプリ島を八時間散策するというのに、ぼくたち二人には、十ドルちょっと、ぼくの父の父が1945年に他の戦勝記念品にまぜて東プロイセンから持ち帰った古いカメラに入ったフィルムが半巻あるだけだった。ぼくたちはほとんど目に焼き付けるだけにしたが、それらはいまだにぼくの記憶の中であざやかだ。その日、母とぼくはあらゆるところを歩いた。まず、騒然とした大勢の観光客がぼくたちを、繁華なカフェやショップがあり、ドイツ語と英語が耳にがやがやと響いている、ウンベルト一世広場へと運んだ。ぼくたちは、まるでコンサートのプログラムかのように、一黒い石板になぐり書きをされていた一日替わりメニューを読んだ。序曲：インサラター・カプレーゼ（モツァレラ、トマト、バジル）。第一バイオリンが入る：ヴィネガーとローズマリー入りウサギ料理。甘いレモンペストリーのリモンセリーは、ピッコロのトリルのようだ。

カプリ島は、公共マップからすぐわかったのだが、二つの町、カプリとアナカプリ、そしていくつかのもっと小さなコミュニティからできている。ぼくたちは徒歩で行ける限り高く登っていくことにした。アナカプリからソラーロ山頂へのリフトに支払うお金はないだろうとわかっていたからだ。ぼくたちは、アーモンドの茂みがあつて、ブロンドで小ぎれいな男たちのカップルがちらほらいる、公立庭園の中をあちこちぶらついた。ぼくの母が濃い緑色のボトルが何百ものっているカウンターに気づいた。地元の素材を使用した香水だ。

「どんな香水がありますか？」とぼくは、やわらかい黄色の服をまとった、すらりとした売り子に尋ねた。

「なんでもあります」と、彼女の指がボトルをひとつ持ち上げて、それを

開け、母に、それからぼくに匂いをかがせた。

それは花盛りのアーモンドのような香りがした。次に売り子は別のガラス瓶を手にとって、ぼくたちにその中身をかがせた。海のそよ風の涼しさが空中を漂った。そのときイタリア娘は右手にアーモンドの花を、左手には海のそよ風を持って、ぼくたちに微笑んだ。

「お好みの割合でこの香水をミックスしてもいいです」と彼女は言った。新鮮な干草の山や、長い風呂のあとの女性の髪 — といった描写から香りを作り直すことができるかどうか尋ねようかと思ったが、英語でもイタリア語でもぼくにはそれを説明する言葉がなかった。

ロシア人ならだれでも訪れてみたいと憧れる場所がある。パリがまずその一つで、リオデジャネイロがその次で、カプリ島が三つめだ。一度でもこれらの場所を尋ねたなら、幸福な人間として死ねるだろう。母とぼくは山のテラスに、ナポリ湾全体が見晴らせるオープンカフェを見つけた。ぼくたちは紅茶をひとつとレモンペストリーをひとつ注文した。紅茶はステンレス製の小さなポットに入ってきて、レモンかミルクも選べるようになっていた。さらにセドルを手放しても惜しくはなかった。

「ヘイマンを覚えている？」と、紅茶を一口すすりながら、そっけなく母が尋ねた。

「よく覚えているよ。どうして？」

「いつかここに来るのが、彼の長年の夢だったから。この島のことならどんな細かいことも知ってた。本で読んでだけどね。」

ヘイマンはモスクワの音楽院で音楽理論を教えていた。彼はポーランド系ユダヤ人で、決して自分の過去を語らなかった。ぼくたちが知っていたのは、クラクフの精神科医の、ドイツ語を話す家庭で育ったことだが、彼の両親はナチスに殺されたのだろうと推測していた。音楽と詩はヘイマンが否定しない唯一の領域だった。彼は教え子だった元大学院生、猫のような目をして、いつも頬を赤らめていた、物静かなスラヴ系のブロンド娘と結婚した。二人の息子のケーシャは、中学校でぼくの親友だった。子どものころ、彼はぼくが出会ったなかで、一番優しくて、正直な笑顔をしていた。高校では、ぼくたちがすでに離れ離れになった後だけれど、ケーシャはボクサーになって、いくつかのメジャートーナメントで勝利した。大学から軍隊に徴兵されたが、

帰ってきたときには傷ついて人が変わっていた。半年後、彼は退学して、うさくさいことに手を出した。彼は、しょっちゅう現れては、『投機事業』を支援するためとか、借金 — 彼の父親が完済していなかったもの — をきれいに清算する手助けをするためとかで、モスクワの共通の友人に資金投入を頼んだ。その後、彼は完全に姿を消してしまった。

ぼくの思い出せる限りでは、ヘイマンは、ストラヴィンスキーのキャリアの解釈という同じ本をずっと執筆していた。一日の音楽の授業が終って家に帰ると、玄関に古びた書類かばんを下ろし、冬のコートとウサギの毛皮帽子を身につけたまま、ピアノに向かうのだった。いつもはストラヴィンスキーのフーガから、ときどき楽句のまん中でちょっと止まりながら、一時間演奏したものだった。三月の午後遅く、ぼくたちがロシアを離れる一年以上前、ヘイマンの妻は彼がピアノのところで死んでいるのを見つけた。

「かわいそうに、彼、カプリ島を見ることはなかったわね。」と、長い沈黙の後、母が言った。「生きてる間に、ってことよ。彼だったら何を思ったかしらね。」

そこで、ぼくたち、つまり母とぼくは、この山島のほぼ頂上で一杯の紅茶を分け合っていた。全世界がぼくたちの足元にあるかのように思えた。ぼくたちには全くお金がなかったし、いかなる身分証明書もなかった。その上、国と国の間にいた。ぼくたちの人生は流動的だったけれど、あたかも運命がぼくたちの肩にその重さのない両手をおいているかのように、非常に穏やかな感じがした。

ぼくたちの隣のテーブルでは、アメリカ人カップルが座って昼食をとっていた。男は大きな腹をして、赤い野球帽をかぶっていた。女は三重顎で、おそらく地元の物売りから買った、トルコ石のついたジブシー風のシルバー・イヤリングをつけていた。ウェイターが二人に、クラブサンドイッチの載った皿を二つと、コカ・コーラのボトルを二本、細長いグラスを二つ運んできた。サンドイッチは巨大で、燻製肉と蜂蜜マスタードのいい匂いを放っていた。黙って満足げにアメリカ人たちは自分たちのサンドイッチにかぶりついて、コカ・コーラをかぶ飲みしていた。

二人は裸でとても幸せで気持ちよさそうで、恐怖や抑圧に傷つくことがまったくなく、将来についての心配もまったくしていなかった。彼らは本当に

信じられないほどアメリカ的で、まるでオハイオ州やペンシルベニア州出身者の空気を充滿した、目に見えない泡を持ち歩いているみたいだった。アメリカ人たちは互いを「パン」や「ラブ」と呼び合っていた。「こいつらの」サンドイッチは、「こいつらの」チーズは、「こいつらの」七面鳥は、とイタリア料理の品質について重々しい批評を交わしていた。ぼくらには実体のないテーマを長々と考えるのがだんだん難しくなってきた。

「アメリカってどんな感じだと思う？」と母がぼくに聞いた。もちろん、ぼくたちはロシア語で話していたから、サンドイッチを食べているカップルにはわからなかった。「だから、本当になにみたいだと思う？」

「すごいと思う。誰もルールを知らずに、そのルールでみんなが遊んでいるゲームみたいだ。居心地のいいところだと思う。可能性がいっぱいある。ママはどう？なにみたいだと思う？」

「わからないわ。やりたくなければ、どんなことにも加担せずすむところだといいわ。きれいなビーチでしょ。わからない。きっと、アメリカをあまりにも長く待ちすぎたから。もう行く覚悟はできているわ。」

「アメリカの女の子はとってもセクシーだろうな。」

眼下にはカプリ島を取り巻く砂州が見えた。生命と色と陽の光にあふれた細い砂州。

「ママ、約束しよう、約束を。いつか、ここに帰ってこよう—ママとパパとだれか。たぶん、ぼくは恋をして結婚するだろう。そしたら、ぼくたち四人でこのカフェにすわって、湾の向こうのソレントを見よう、そして、クラブサンドを、いっぱいクラブサンドを注文しようよ、それにももちろんシャンパンもね。そして、アメリカでの新しい生活について話して、ロシアでの昔の生活を思い出すんだ。ねえ、どう思う。」

「きっと、素敵でしょうね。それに、とくにあなたのアメリカ人の奥さん。目に浮かぶわ。」

明るい雲がぼくたちの頭上を去来していた。かもめが鳴いた。一陣の風がテーブルからナプキンを吹き飛ばした。

母は腕時計を見た。「行かなくちゃ。今度はもう私たちを待ってくれないわよ。それに、新しいフェリーのチケットを買うお金は全然ないしね。」

「そうだね、ママ、たぶん、ここに暮らすことになるかもね。これきりパ

ラダイスに移住するってのはどう？」

「その覚悟はできてないと思う。それに、あなたの父さん、ここは気に入らないでしょう。」

ぼくたちが席を立つとき、今度は粉のかかったドーナツとコーヒーをたいらげている、幸せなアメリカ人カップルをぼくは最後に一度ちらりと見た。

アメリカでのほぼ二十年間の後、ぼくはたまに意気消沈しているとき、カプリ島でのあの日の終わりを、どんなふうに曲がりくねった道を下りて母とぼくがフェリーに戻っていったかを思い出す。突然、雨が降り出した。ぼくたちは淡紅色のロバを連れた老婆を、それから手をつないだ男たちのカップルを、それから釣竿をもった少年を追い越した。母とぼくはただ目と目を見交わした。どんな言葉を使っても、ぼくたちのパラダイスの貧困を表現することはできなかつただろう。

本郷の春

Весна в Хонго / The Spring in Hongo

A Series of Lectures on Vladimir Nabokov and Writers in Exile

——ウラジーミル・ナボコフと亡命作家たちをめぐる連続講義の記録——

沼野充義・毛利公美・奈倉有里 編

Edited by Mitsuyoshi Numano, Kumi Mori, and Yuri Nagura

発行 東京大学文学部現代文芸論研究室・スラヴ語スラヴ文学研究室・

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

発行日 2011年3月25日

The Department of Contemporary Literary Studies

in collaboration with

The Department of Slavic Languages and Literatures

The Faculty of Letters, The University of Tokyo

7-3-1 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113-0033 Japan

March 25, 2011
